

「ワンダリング・スター」

written by ハスキー

高速バスの窓の外は暗闇だった。乗客はみな日中の疲れを折り畳むように黙りこくって、空席が目立つ車内を、白色灯が寒々しく照らしていた。終点の仙台駅まであと一時間無いくらい。道中唯一の休憩所であるサービスエリアを出たところだ。私は運転席から三つ後ろの窓側に座り、今しがた腹に入れたコロッケパンの油がバス酔いを誘発しないか心配していた。空腹を我慢し続けるのも辛い、この時間のサービスエリアだと間食になる物の選択肢が極めて少ないから、仕方なく買ったコロッケパンだ。バス酔いが怖くて文庫本を開くのも憚られ、ただ漠然と車窓を眺めて時間を潰した。

突然、背後の座席から曲が流れてきた。よくあることだ。粗野な音質はスマートフォンのスピーカーから鳴っているのだろう。乗客全員が一瞬で全てを了解する気配を感じた。打ち合わせもしていないのに、示し合わせたかのように、誰も何も言わなかった。何も起こっていない事にしたかった。曲は流れ続けた。二番のサビが終わった間奏あたりで、もうこれは「よくあること」の範疇を超えてしまっているのではないか、という疑いが確信に変わった。もはや車内は緊張感と無言の祈りに満ちていた。頼む、これ以上続かないでくれ。車体の振動と籠った走行音に身を委ねるだけの、無感動な移動時間でいさせてくれ。アウトロのフェードアウトと反比例するように上昇する祈りのボルテージが閾値に達したのか、分からないが、丸々一曲を流しきって音は止まった。やはり誰も何も言わなかった。

私は最初からそれがポータイスヘッドの「ワンダリング・スター」という曲だと知っていた。ヴォーカルの女性が切々と歌う、暗い感じの曲だ。なんとなく分かる選曲だった。今になって振り返ると、あの異様な体験は初めから映画のワンシーンだったような気さえしてくる。あの時曲を流した人は、自分だけの映画の世界に私達を招き入れたのだろうか。